

ユネスコ創造都市ネットワーク 浜松市による加盟申請書

1 都市名

浜松市

2 担当者

寺田賢次 浜松市企画調整部長
影山伸枝 浜松市企画調整部企画課創造都市推進担当課長
430-8652 浜松市中区元城町 103-2
電話 053-457-2301 FAX053-457-2248

3 分野

音楽

4 はじめに

浜松市は世界に誇る多くの起業家や産業技術を創出してきた創造都市であり、地域の人々が多様な伝統文化を受け継ぎ、20 世紀以降の楽器産業の集積を活かして音楽のまちづくりに取り組んできた。世界をリードする楽器産業と音楽を愛する市民、行政などにより「音楽のまち」として発展してきた経験や実績をもとに、音楽創造都市としての登録を目指し、創造都市ネットワークの一員として、文化的多様性の実現と世界平和に積極的な貢献を図ることを期する。

浜松市がユネスコ創造都市ネットワークの音楽部門に登録される意義と重要性について、グローバルな視点から、以下のように整理できる。

第 1 に、特にアジアで初めての音楽都市の誕生は、ユネスコが提唱する文化的多様性の実現に資するという点である。

第 2 に、地域資源と人材を活かして、産業都市から創造都市への転換を果たし、さらにグローバル化と IT 社会に対応した未来の音楽文化を発信・提案できることである。

第 3 に、在住外国人の多い都市として外国人との交流や共生に取り組んできた浜松市が加盟することは、世界各地域の課題である多文化共生の面において、創造都市ネットワークの発展にとって有意義である。

最後に、今、世界中がそれぞれの文化を背景に、大きな変革期にある国際社会において、望ましい未来のために何ができるのかという命題に浜松市は取り組む用意がある。

浜松市は、ユネスコのグローバル・アライアンスに参加し、音楽というヒューマニズムのネットワークでこの世界を包み、多様な文化を認め合う国際社会の実現に寄与できると確信する。

(1) 浜松市の特徴

<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/foreign/english>

地理・気候

浜松市は、日本の首都・東京と第二の経済圏の中心地・大阪の二大都市の中間に位置する。行政区としては

富士山のある静岡県に属し、浜松の市域は静岡県の西部地域に広がっている。面積は約1,558 km²で、日本で二番目の広さの都市である。北は赤石山系、東は天竜川、南は遠州灘、西は浜名湖と四方を異なる環境に囲まれ、市域の68%を森林が占めている。

気候は比較的温暖であるが、冬は「からっ風」と呼ばれる北西の強い季節風が吹き、気温以上に寒く感じられる。

人口

現在の浜松市が誕生したのは1911年、この時の人口は約4万人であった。2014年1月時点での人口は、約812,000人である。静岡県内では人口が最も多い都市である。

歴史

歴史的には、浜松市内の伊場遺跡から出土した木簡(もっかん)に「浜津」という記述があり、浜松の名称の起源が1,300年前から続く古い地名にあることが確かめられている。

浜松は、日本の東西、大都市である東京と大阪を結ぶ街道のほぼ中央に位置しており、江戸時代(17～19世紀)には多くの宿泊施設(本陣や旅籠)が置かれ、人や物が行き交う「宿場町」として栄えた。また、東西の交流だけでなく、塩・海産物の運搬や、山間地域にある秋葉神社への巡礼などにより、内陸部とも人や文化の交流があり、現在でも文化的なつながりが続いている。交通の要衝であり、江戸時代に領主が頻繁に交代したことなどが、他地域からの人材を受け入れる風土と自主独立の気風を育んだともいえる。

この風土と気風のもとで、浜松から世界的な企業家や発明家が数多く誕生している。例えば、鈴木道雄(オートバイ、自動車の「スズキ」創業者)、本田宗一郎(オートバイ、自動車の「本田技研工業」創業者)、高柳健次郎(世界に先駆けて全電子方式のテレビジョンを完成)、杉浦睦夫(世界初の胃カメラを開発)などである。

インフラストラクチャー

浜松は、都市基盤が十分に整備されており、市民が文化的な生活を送ることができる環境が整っている。

道路に関しては、東名高速道路と新東名高速道路が東西に横断している。これらの高速道路と市内の国道等との接続により、首都圏からのアクセス性は高い。2013年4月1日道路延長は、8,378kmである。

公共交通は、JR東海道線、JR東海道新幹線、JR飯田線、遠州鉄道、天竜浜名湖鉄道といった鉄道と、バス交通で構成される。JR東海道新幹線により、東京には1時間30分で行くことができる。

都市公園は528箇所、622.98haが開設されている。また、市北部の森林の一部は、天竜奥三河国定公園及び奥大井県立自然公園が指定されており、浜名湖沿岸及び遠州灘沿岸の一部では、浜名湖県立自然公園が指定されている。

水道は96.2%、下水道は78.6%の普及率である。

浜松の産業

浜松市の2012年における工業関係の事業所数は4,321、従事者数は80,486人、製造品出荷額は、2兆0145億円である。農業に関しては、2006年における農業出荷額は540億円である。商業に関しては、2007年における商店数は9,455、従事者数は69,672人、年間販売額は2兆9044億円である。

浜松の工業の起源は、17～19世紀にさかのぼる。当時の織物、製材、木材加工産業などが、地域の経済基盤を作り上げた。浜松とその周辺には水田が少なかったため、荒れ地が開墾されて綿花が栽培され、18世紀には木綿の大産地となり、遠州織物の産地として知られていた。そのため、多くの機屋とともに、織機製造者も多く居住し、やがてこれらの中から織機メーカーが生まれることになる。

また、天竜川沿いの綿や木材を集積する、木綿工業や木材加工の拠点となり、織物から自動織機の発達があり、製材から木工機械が開発され、それらの地域技術が基盤となってピアノ、そしてオートバイ、自動車などの輸送機械産業へと進展した。

1868年(明治時代)以降は、繊維、形染、楽器などの産業を中心に発展した。1897年前後には、日本楽器(現在のヤマハ)が設立され、その後、ホンダやスズキなど自動車産業が発展し、日本の地方都市において有数の内発的発展を遂げた都市として評価されている。

浜松市を中心とする静岡県西部地域は、日本で最大、世界的にも有数の楽器工業集積地域である。この地域の楽器生産数量が日本全体に占める比率は、2009年ではピアノが100%、電気・電子ピアノと電子オルガンが97.9%、電子キーボードとシンセサイザー等が86.9%、管楽器が79.5%を占めている。

楽器産業の発展についてみると、第二次世界大戦後の高度成長期に、特にピアノについては、独特の大量生産の導入により、国内市場の開拓と、輸出の開始で飛躍的に成長した。一方で、楽器という文化的製品の特徴から、アーティストを活用したイメージ戦略等により、教育用需要に対応した音楽教室の展開など音楽文化の普及に注力してきた。楽器を嗜むことは生活文化とも関わっている。学校や家庭へ楽器を普及させていくことは、人々が音楽を楽しむ文化が求められる。その意味では、ヤマハ、河合楽器製作所をはじめとする浜松の楽器メーカーの事業は、楽器製造に加えて音楽文化の大衆の普及を結合して推進しており、楽器産業から音楽産業へ展開してきたといえる。そのような事業展開などが浜松における「ものづくりのまち」から「音楽のまち」への発展に結びついたと考えられる。

大手3社を頂点に中堅メーカーが集積する楽器製造業においては、従業者は約1,900人おり、これは日本国内の楽器製造従業者数の20.2%を占める。製造品出荷額は230億円である。さらに、この楽器産業を支える部品メーカーがその下請け企業群として集積している。下請け企業は、木工業、鉄工業、塗装/表面処理、鋳造、プラスチック成形、電子部品製造などの業種である。

楽器関連産業はインテリア関連を含めた「生活文化提案型産業」への転換を図っている。木工業から家具産業へ、楽器関連電子部品製造から音楽ソフト開発への移行などがその一例である。

文化と特性(先進性・多彩性・多様性・国際性)

浜松市には、固有の歴史や風土に培われた文化財をはじめ、日常生活や地域に根ざした行事や祭事が多数存在している。これらは、人々の暮らしの中から生まれ受け継がれており、浜松市固有の文化や個性豊かな地域を創造してきた。

遠州灘における大凧揚げ合戦は、現在も浜松まつりとして、地域コミュニティを挙げた都市の祭りに発展しており、浜松市民のアイデンティティと心意気を示すものとなっている。凧揚げは、子どもが生まれると町内の若者たちが凧を贈って揚げるという江戸時代に広まった風習が続いているものである。

浜松市が指定した指定無形民俗文化財には、祭礼、農村歌舞伎、田楽や舞など、音楽に関わる日本の貴重な伝統文化が数多くある。各地域で様々な行事や祭事が受け継がれていることは、人々の生活の中に音楽が深く関わっていることを示している。

一方、浜松市には、グローバルに展開する企業が立地し、地域の経済活動を支える外国人市民が数多く住んでいる。現在では、人口の2.6%にあたる約21,300人の外国人が住んでいるが、これは日本全体の外国人比率の約1.6%と比べて多い。特に、南米の出身者が多く、ブラジル人市民と日本人との相互理解を深めるためのイベントであるサンバパレードが毎年中心市街地で開催されているなど、市民が多様な文化に触れる機会があり、世界を身近に感じることができる都市である。また、国内の外国人住民に関する施策の情報交換や問題解決のために設立された「外国人集住都市会議」に参加し、多文化共生の問題に積極的に取り組んでいる。

行政組織など

浜松市には、議決機関と執行機関がある。議決機関とは市民の選挙によって選ばれた議員によって構成された市議会、執行機関は、議決機関によって決められた仕事を実施するところである。執行機関には、市民の選挙によって選ばれた市長をトップに、部・課・グループというようにピラミッド状に組織される市長事務部局のほか、いくつかの委員会がある。

執行機関の中で、ユネスコ創造都市ネットワークに関しては、企画調整部企画課の創造都市推進グループが

担当している。当グループは、全市を挙げて文化振興及び創造都市の形成を推進していくため、2012年に設置された部署である。また、芸術文化を担当する部署は、市民部文化政策課である。文化政策課は、文化芸術及び音楽文化の施策の企画、調整及び実施に関することを担当するほか、外郭団体である公益財団法人浜松市文化振興財団との総合調整に関することを担当している。

浜松市文化振興財団は、優れた芸術その他の文化の提供、交流、創造、発信を行うこと並びに市民・地域の芸術文化活動の支援をとおして市民文化の向上及び地域社会の活性化に資することを目的として、1993年に設立された。行政の文化施策を補完する役割もある。基本となる財産は約21億円で、浜松市が約20億円を出損しているほか地元の金融機関、音楽産業その他の企業、電力会社など約30社の出損を得ている。事業内容は浜松国際ピアノコンクールの運営、浜松市アクトシティ音楽院の運営などから市民文化団体の援助まで多岐に及んでいる。

(2)創造都市の推進

行政の計画

浜松市における行政の計画の中で、「音楽のまちづくり」は、楽器産業の集積を活かして“音楽”をキーワードに新たなまちづくりを展開しようと取り組まれた。市制70周年にあたる1981年に策定された第2次浜松市総合計画新基本計画の中に「音楽のまちづくり」を政策として取り入れたことにより本格化する。浜松は、木工、織物が盛んなところで、その技術集積が楽器産業へと広がった経緯がある。当時は、こうした楽器産業の集積を活かして、「ものづくりのまち」から、音楽というソフトをキーワードにまちづくりを展開しようと考えられた。

1991年に策定された第3次浜松市総合計画新基本計画では、「音楽文化都市構想」が掲げられ、都市づくりの目標のひとつとして「世界の音楽文化が薫る都市づくり」の推進が位置づけられた。

2007年に策定された第1次浜松市総合計画では、【都市の将来像】に『市民協働で築く「未来へかがやく創造都市・浜松」』を位置付け、2009年3月に文化政策における中期計画「浜松市文化振興ビジョン」が策定され、2013年3月に創造都市の意義の明確化と創造都市の姿や取り組みのイメージを示した『「創造都市・浜松」推進のための基本方針』が策定された（「浜松市文化振興ビジョン」、「『創造都市・浜松』推進のための基本方針」の詳細については、「7.コミュニケーションと可視資源」の項を参照）。

創造都市の推進体制

2010年、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟を推進するため、産業界・学術機関・行政・市民団体の合意形成を図る浜松創造都市推進会議とユネスコ加盟申請検討委員会が新たに組織された。いずれも連絡先は「2.都市の正式な連絡担当者」と同一である。

浜松創造都市推進会議は、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟を推進するほか、2013年3月には『「創造都市・浜松」推進のための基本方針』を策定し、今後の音楽を活かしたまちづくり、「音楽の都・浜松」の都市づくりについて方向性を示した。メンバーは以下のとおりであり、事務局は、浜松市企画課創造都市推進グループである（連絡先は、『2.都市の正式な代表者の連絡先』と同じ）。

会長：鈴木康友（浜松市長）

委員：伊藤修二（浜松市文化振興財団理事長）

委員：大須賀正孝（浜松商工会議所会頭）

委員：熊倉功夫（静岡文化芸術大学学長）

委員：山本大輔（浜松青年会議所理事長）

委員：初村則子（浜松市合唱連盟副理事長）

アドバイザー：佐々木雅幸（大阪市立大学教授）

アドバイザー：松浦晃一郎（元ユネスコ事務局長）

ユネスコ加盟申請検討委員会は、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟申請をするにあたり、基本的な方針

を検討し、素案策定に係る審議を行なうために、浜松創造都市推進会議の下に設置された。検討委員会は2010年10月までに3回開催され、申請内容を審議した。メンバーは以下のとおりである。

委員長:根本敏行(静岡文化芸術大学教授)

委員:池谷和宏(浜松市生活文化部長)

委員:松尾秀樹(浜松商工会議所地域連携課長)

委員:齋藤慎五(浜松市文化振興財団常務理事)

委員:中村勝也(ヤマハ株式会社総務部副部長)

委員:金子和浩(株式会社河合楽器製作所総合企画部長)

委員:渥美晴彦(ローランド株式会社総務部長)

委員:田村滋治(浜松交響楽団理事長)

委員:平野修(平野美術館事務長)

委員:河合正志(まちなかにぎわい協議会(中心部活性化のための団体)事務局長)

委員:鈴木建也(やらまいかミュージックフェスティバル実行委員長)

5 創造性に関する資源や取り組み

(1)文化事業

国際的な音楽事業

【浜松国際ピアノコンクール】<http://www.hipic.jp/eng/>

1991年に浜松市制80周年を記念して、楽器と音楽のまちとしての歴史と伝統を誇るにふさわしい国際的文化事業としてスタートし、以後3年毎に開催されている。その目的は若いピアニストに世界へ羽ばたくきっかけを与えることである。海老彰子をはじめとして、世界的に著名なピアニストが審査にあたる。予選の全員にフルコンサートピアノを使用して1日4時間以上の練習時間を確保し、遠方からの参加者には交通費補助制度などがある。1998年には、国際音楽コンクール世界連盟に加盟した。

また、市民のボランティアやホームステイ、コンクールを終えたピアニストによるホームコンサートを開催するなど、市民レベルでのさまざまな取り組みが実施されている。

コンクール会場での地元のフラワーデザイナーやアーティストのコラボレーション企画や、パティシエ、伝統工芸の職人等により開発された関連商品の提供は、市外から訪れた人々への「おもてなし」として好評を得ている。

2012年11月10日から24日までの期間で開催された第8回コンクールには、世界31カ国1地域から288名の申し込みがあり、予備審査の結果、16カ国1地域から73名が出場した。また、コンクールを身近に楽しめるようにピアノを主役とした関連イベントや市民参画等、多くの事業が開催され、市民ボランティア121人、ホームステイの受け入れ17家庭、コンクールを終えたピアニストによるホームコンサート6回、スクールコンサート18校、ショッピングセンター等でのシティコンサート9回であった。コンクール及びイベントへの動員数は、延べ76,000人であった。

第6回大会からは、インターネットによる映像発信をしている。第8回大会では新たにフランスの業者による映像配信も行い、配信終了までに140万件を超えるアクセス数となった。

同コンクール期間中の市内への経済波及効果は、企業・産業への生産誘発効果が約3億6千万円、雇用者所得増加効果が約9,100万円である。

【静岡国際オペラコンクール】<http://www.suac.ac.jp/opera-en/>

1996年より3年毎に開催される。同オペラコンクールも2003年に国際音楽コンクール世界連盟に加盟しており、浜松市は2つの加盟コンクールが開催される、日本国内では唯一の都市である。

第6回は14か国1地域から177名の応募があり、このうち62名が出場した。旅費の補助などもあり、ピアノコンクール同様丁寧な運営をしている。

このコンクールのユニークな課題の1つに、オペラの一役の全曲中から審査委員会が指定する箇所を演奏するというものがある。オペラアリアだけを扱うのとは異なり、オペラ作品一曲を歌い演じる力が求められている。

【浜松世界青少年合唱祭】

1991年に市制80周年を記念して始まり、以後概ね5年毎に開催している。世界各国から青少年合唱団体を浜松に招聘し、音楽を通して浜松市民及び青少年との交流、国際友好親善を図るとともに、世界の音楽文化の発展及び浜松市民の音楽文化の向上と音楽のまちづくりの推進、さらには“音楽のまち・浜松”を内外に発信することを目的としている。

メインコンサート及びまちかどコンサートに出演する合唱団員(約600名)及びホームステイの受入家族(約120家庭)、合唱祭関係者が一堂に集まり、ゲームなどで交流を図っている。

特色ある音楽文化事業

【浜松吹奏楽大会】

1989年から国際的な視野で吹奏楽を普及することと、市民に吹奏楽の素晴らしさや楽しさに触れる機会を提供することを目的に毎年3月に開催されている。これまで、日本吹奏楽指導者協会の指導のもとで、全日本高等学校選抜吹奏楽大会と全日本中学生・高校生管打楽器ソロコンテスト、全国中学生交流コンサートを開催してきた。台湾、韓国、ハワイなど環太平洋の高校生をゲスト出場校として招く年もある。

2013年の浜松吹奏楽大会には高校生バンド17団体、中学生バンド4団体が出場し、関連イベントを含む入場者数は約9,000人であった。

【バンド維新】

日本を代表する作曲家陣による新作を、浜松市内の中高生吹奏楽団体が世界初演となる作品発表を行うコンサートである。

作曲家は「吹奏楽」の枠にとらわれないウィンド・アンサンブル作品の可能性にチャレンジし、演奏者は、いわゆる『吹奏楽』曲とはひと味違う世界に触れ、さらに作曲者から直接指導を受ける。

これまでに日本作編曲家協会会長の服部克久、シンセサイザーミュージックの第一人者である富田勲、2008年プッチーニ国際賞を受賞した三枝成彰などが新作品を作曲し、このイベントのために提供している。

この事業では、若手作曲家からも作品を公募する。優秀作品は著名作曲家の作品とともにコンサートが開催され、同時に譜面とCDも発売する。若手音楽家を世界に送り出すためのアーティスト支援にもなっている。

この事業は毎年浜松で開催するほか、札幌、東京など、浜松以外でも展開している。浜松から発信し、全国に波及している事業である。

【こども音楽鑑賞教室】

浜松市内の小学校5年生全員、約8,000人を対象に良質の音楽に触れ、子どもたちの心を育てるためにプロオーケストラの演奏を鑑賞する機会を提供している。将来の文化の担い手を育成することを目的に2002年から始まり、浜松市内の音楽教員が内容を企画し、名曲鑑賞や楽器と曲の解説だけでなく、合唱やリコーダーでのオーケストラとの共演など多彩なプログラムで本物の音楽に触れる機会を提供している。

【プロムナードコンサート】

浜松の玄関口である浜松駅前北口広場「キタラ」で1984年から始められた吹奏楽コンサートである。浜松市民だけでなく鉄道で浜松へやってきた旅行者にも楽しまれている。

現在では毎年、春から秋の毎週土曜年間約20回開催されている。出演団体は小学校から一般吹奏楽団まで

90 団体以上、観客は延べ 25,000 人前後にのぼる。

【やらまいかミュージックフェスティバル】

2007 年から毎年開催されているフォーク、ロックの音楽祭である。「市民が奏でる、市民が楽しむ、市民がつくる音楽祭」を合言葉に、市民の手作りによる“音楽の浜松まつり”を目指している。2013 年 10 月には浜松市中心部の屋外 25 ステージで開催され、1,221 人(294 組)が出演した。観衆は約 33,000 人。運営にあたり、延べ 425 人の市民のボランティアが参加した。楽器作りや演奏体験のワークショップも開かれた。

ちなみに「やらまいか」とは、「何事にも挑戦しよう」という浜松市民の進取の気性を表す方言である。

【浜松市民オペラ】

浜松市、浜松市文化振興財団とともに浜松シティオペラ協会、浜松交響楽団、浜松オペラ合唱団が主催であり、浜松市民によるオリジナル企画である。1991 年に、市制 80 周年を記念して第 1 回市民オペラ「カルメン」を開催し、以降、「椿姫」「三郎信康」(浜松市ゆかりの武士を主人公とした作品)、「魔笛」「ラ・ボエーム」を上演した。

現在は 2014 年 9 月に上演する「ブラック・ジャック」を制作している。本作品は著名な漫画家手塚治虫の作品を原作とした新作オペラである。

【伝統音楽】

浜松市北部には、神楽や田楽、ひよんどり、おくないなどの祭礼や農村歌舞伎などが伝承され、全国的に貴重な伝統芸能の宝庫となっている。国、県や市の無形民俗文化財が点在し、その宗派において全国の寺社の総本山となる方広寺や秋葉神社も人々の信仰を集めている。浜松市楽器博物館では、こうした地域の伝統芸能を映像と音で記録し、保存する作業も進めている。

伝統音楽は学校教育の中でも教えられるが、祭礼や伝統行事に使われることが多いため、ほとんどがコミュニティで伝承される。祭りの近くなると神社や公民館に集まって練習する姿が見られる。神仏に収穫を感謝し、繁栄を祈るために伝統音楽を守ることが、コミュニティの結束を強くしていることにもつながっている。

(2) 人材・関連団体・拠点

音楽に関する豊富な人的資源

【指導者派遣事業】

浜松市アクトシティ音楽院では、音楽による開かれた地域づくり、学校づくりをサポートするために音楽指導者派遣事業を行っている。団体や学校からの希望に応じて音楽院は登録講師を派遣する。声楽、管楽器、打楽器、弦楽器、鍵盤楽器から和楽器、民族楽器などジャンルは多岐に渡り、現在の登録講師数は 135 人である。2012 年の派遣回数は 260 回、受講者数は約 45,000 人であった。

【演奏者派遣事業】

浜松市アクトシティ音楽院では、浜松国際ピアノアカデミーや浜松国際管楽器アカデミーの修了生に演奏の機会を提供している。演奏者派遣事業では、市民の希望に応じて市内の学校やイベント会場に無料で修了生を派遣し、修了生に受講の成果を披露させている。2012 年には 8 回開催し、約 1,100 人が来場した。

また、2013 年からは新たにトップレベルの演奏者が身近に音楽を届ける機会として、市内小学校を対象にプロの演奏家を派遣する事業も開始した。日常空間において音楽を楽しむことを目的とし、広い会場ではなく音楽室などの小スペースにて一流の音楽を体感できる機会を提供している。

数多くの合唱団・楽団等

【合唱】

1994年、アクトシティ浜松の開館の年に浜松市合唱連盟が設立された。名誉顧問、顧問、会長については、市長、浜松市教育長、浜松市立高等学校校長が務めている。現在の浜松市合唱連盟への加盟団体総数は192団体(小学校105、中学校49、高校3、一般35)であり、2013年の浜松市民合唱祭には58団体の1,250人が出演した。

【オーケストラ】

1976年に浜松青年会議所を母体として設立された浜松交響楽団は、日本では唯一の公益財団法人として運営するアマチュアオーケストラである。年2回の定期演奏会のほか、オーケストラ教室、ファミリーコンサート、移動オーケストラ教室を開催している。また、若手音楽家の育成を目指し、ソリストオーディションも行っている。

このほか、主なアマチュアオーケストラとして楽友会オーケストラ浜松、浜松市民オーケストラなどがある。また、非常設のプロオーケストラとして浜松フィルハーモニー管弦楽団協会がある。

【吹奏楽】

浜松における吹奏楽は、全国的にもレベルが高く、市内中学校の93%(58校中54校)、高等学校の100%(31校すべて)に吹奏楽部があるほか、学校でのクラブ活動以外にも約20の社会人の団体があり、日本の同規模の他都市を数で大きく上回る。現在101の団体が浜松市吹奏楽連盟に加盟している。また、2013年に開催された第61回全日本吹奏楽コンクールでは浜松市の吹奏楽団が、中学の部で銀賞、高校の部で銀賞、職場・一般の部で金賞を獲得した。

サクソ奏者須川展也が常任指揮者を務めるヤマハ吹奏楽団が浜松の代表的なバンドである。

2011年には日本を代表する作曲家保科洋を迎えて浜松初のプロの吹奏楽団であるフィルハーモニックウインズ浜松が設立され、演奏会だけでなく浜松市中学校選抜吹奏楽団オーディションにおいて審査を担当するなど、浜松地区への貢献度が高く評価されている。

音楽のまちの活動拠点

【公共ホール】

浜松市には、アクトシティ浜松を筆頭として公共ホールが約20ある。このうち、3つのホールにはパイプオルガンが設置されている。また、地域ごとに設けられた公民館の多くにもホールが併設され、地域の吹奏楽団サークルなどに活用されている。

アクトシティ浜松は、国際的な音楽イベントが開催できる二つのホールを中心に、ホテル、展示場、会議室棟や楽器博物館を併設する施設である。

<http://www.actcity.jp/english/>

大ホールは日本で初めてとなった四面舞台を設置し、本格的なオペラや歌舞伎が上演できる2,336人収容の施設である。中ホールは、残響時間2.1秒のクラシック音楽指向のシューボックス型のホールである。ヤマハ音響研究所が、ウィーン楽友協会大ホールを参考に音響設計し、コンピューターシミュレーションにより豊かな響きと広がりのある音場を追求した。いずれのホールも、同時通訳設備、音場支援装置、大型映像装置を備えている。また、研修交流センターには約300人を収容する音楽工房ホールのほか、13の音楽セミナー室(練習室)がある。アクトシティ浜松は練習用を含めて21台のピアノを保有しており、ピアノ生産国内シェア100%を誇る地域ならではの数である。

【民間ホール】

「かじまちヤマハホール」(株式会社ヤマハミュージッククリテイリング)、「アポロホール」(東洋ピアノ製造株式会社)、「ローランド浜松研究所音響リファレンスホール」(ローランド株式会社)は、いずれも楽器メーカーが設置、運営するホールである。

【その他の拠点】

浜松市には、ホール以外にも音楽拠点もある。浜松駅前北口広場「キタラ」、新東名高速道路サービスエリア「ネオパーサ浜松」のミュージックスポット、浜名湖ガーデンパーク・屋外ステージが代表的なものである。特に、「キタラ」や「ネオパーサ浜松」で行なわれるコンサートは、浜松を訪れた人が音楽に気軽に触れることができる場所となっている。

その他の創造資源

映画館:2つのシネマコンプレックスと1つの映画館(19スクリーン)

書店:240店舗

図書館:26館(蔵書数 2,196,204冊)

博物館:4館(博物館法に基づく施設)

(3)教育・人材育成

学校教育と音楽

【公的な教育機関】

浜松には、音楽科を擁する高等学校が2校ある。私立浜松学芸高等学校と静岡県立江之島高等学校である。浜松学芸高校の音楽課程には、ピアノ、声楽、教育音楽、作曲、管弦打楽器・箏、幼児・初等教育といった専攻がある。また、全国でも珍しい電子音楽課程もある。ともに、音楽理論、音楽史、演奏研究、ソルフェージュ、重唱、合唱、重奏、合奏、専門実技を学習している。3年間に取得させる単位数は、普通科目53単位に対して、専門科目(音楽科目)が34単位である。浜松江之島高校でも同じような教育課程を行っている。こちらには邦楽器の専攻がある。3年間に取得させる単位数は、普通科目54単位に対して専門科目が34単位である。

卒業生の中には、東京芸術大学や国立音楽大学をはじめとする芸術大学の音楽コース、あるいは総合大学の音楽学専攻や音楽教育の専攻へ進学して、プロの演奏家を目指す者も多い。

【静岡文化芸術大学】<http://www.suac.ac.jp/english/>

2000年4月に開学した県立大学である。文化政策学部、デザイン学部の2学部、及び大学院(文化政策研究科、デザイン研究科の2研究科)を擁し、学部、大学院を合わせた1学年の定員は320名である。アメリカ、イギリス、中国、韓国、フランス、インドネシアの大学と交流協定を締結し、積極的に国際交流を行っている。博物館学芸員資格のほか、中学・高校教員免許、図書館司書資格などが取得でき、これまでの卒業生は学部3,443人、大学院133人である。

このうち文化政策学部芸術文化学科においては、音楽史、音楽文化論、音楽理論、アートマネジメント等に関する講義科目が開設され、演奏会の企画・制作、ホール運営等に携わる人材を育成している。

音楽ホール等で開催されている室内楽演奏会では、招聘音楽家による質の高い演奏と大学専任教員の研究成果を交えたプログラムが供され、毎回好評を得ている。この演奏会には、学生がスタッフとして関わり、演奏会の企画・制作を実践的に学ぶ場ともなっている。

また、開学以来、日本の伝統芸能である「薪能」の自主講演が続けられている。毎回、プロによる伝統的演目の公演に加えて、大学の教員、学生による新作が発表されるなど、新しい音楽・演劇の文化創造・発信機能の一端も担っている。

さらに、芸術文化学科の専任教員は浜松国際ピアノコンクールの要職を務めるほか、楽器博物館の運営委員等として企画展の開催や博物館資料の学術研究にも携わっている。静岡国際オペラコンクールでは、実行委員会事務局が大学内に設置され、職員がコンクールの企画・運営、関連イベント等のマネジメント業務に携わっている。

静岡文化芸術大学に関わる優れた人材には、作曲家で2008年プッチーニ国際賞を受賞した三枝成彰、西洋音楽史と音楽美学の研究者である平野昭などがいる。

浜松の多様な音楽教育プログラム

【浜松市アクトシティ音楽院】

浜松市アクトシティ音楽院は、浜松市が 1998 年から実施している音楽人材育成プログラムである。その基本的コンセプトは、音楽文化が育ち、音楽関連産業が経済を支える都市を実現することにある。そのため、市民がより音楽に興味を持つことができる機会の提供から未来の演奏家となる人材の育成、音楽指導者やコンサート主催者となる人材の養成まで様々な音楽に関する事業を幅広く包括し、柔軟かつ系統的に実施している。講師陣には、ショパン国際ピアノコンクールで入賞した中村絃子、静岡文化芸術大学名誉教授平野昭、NHK 交響楽団演奏企画部長や東京都交響楽団演奏制作部長を務める竹森道夫のほか、第一線で活躍している一流のアーティストを世界各地から招き、指導にあたっている。

このアクトシティ音楽院の事業は 2 つの大きな柱から成り立っている。

1 アカデミーコース

演奏家を目指す若い人に演奏家としての必要な技術などの習得や演奏機会の提供を行うコース。

内容は、海外演奏家を講師として迎え、管楽器の奏者を育成するためのセミナーと講師陣によるコンサートを開催する「浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバル」、国内外の著名なピアニストを教授として迎え、世界で活躍できるピアニストの育成を目的として、公開レッスンやコンクールを開催する「浜松国際ピアノアカデミー」などを実施。指導を受けた受講生はその後も、世界的なコンクールで脚光を浴びている。

講師陣及び修了生の活躍について、詳細はウェブサイトを参照いただきたい。

■浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバル

http://jp.yamaha.com/about_yamaha/community/hamamatsu_wind_academy/english/

■浜松国際ピアノアカデミー

<http://www.actcity.jp/hacam/PianoAcademy/>

2 コミュニティコース

市民が、音楽に更なる関心を持ち、音楽の楽しみ方を学んでいただくという視野にたったコース。このコースでは、小中学校の課外授業にも取り入れられるなど、地域と一体となった人材育成を進めている。

内容は、市内学校や音楽団体を対象としたジャズ指導を行うジャズクリニック、小中学生を対象とした吹奏楽、洋楽、邦楽の体験型セミナーと発表会を開催する子ども音楽セミナー、市内の小中学校から選抜された生徒の音楽面・技術面のレベルアップを図り、学校全体の音楽技術向上を図る吹奏楽リーダー養成講座などがある。

コミュニティコースで特徴的な事業は、主催者育成セミナーである。演奏家や聴衆の育成と併せて企画者の育成も必要であるとの認識から、音楽イベント開催のノウハウを備えた人材を増やし、浜松の音楽文化が自立的で自発的に活動するための手助けになることを目指しているものである。受講生は大学生から定年退職者まで様々な年齢・職業の市民である。クラシック音楽にとらわれず、各種ジャンルのコンサートの企画運営を手掛け、市内の大学や企業から協力を得るなど新しい試みも行っている。

このセミナーの趣旨は、コンサートの運営における基礎知識を講座で学び、その知識を基に自らが企画し、コンサートを開催することである。マネジメントという要素が加わることで、市民の音楽を鑑賞するという立場から、仕掛ける側へと導くことへもつながっている。

修了生はすでに 200 人を超え、その中からは、企画運営会社に就職してプロとしてイベントのマネジメントに携わる者、自分で企画会社を立ち上げる者、NPO 法人を設立して年間約 50 公演を手掛ける者、セミナーによって繋がった仲間によって浜松市民オーケストラを設立する者など、積極的に市民と音楽を繋ぐ活動を行う者が数多く輩出しており、今後のより一層の活躍が期待される。

【「ジュニアオーケストラ浜松」・「ジュニアクワイア浜松」】

浜松市の外郭団体である浜松市文化振興財団が運営するオーケストラ及び合唱団で、小学3年生から高校3年生までの子供たちによる編成である。小中学生の中から歌や楽器の演奏に優れている子供たちを選抜し、一般の音楽教育とは異なる特別な訓練をすることによって子供たちの音楽的才能を伸ばしている。団員数はジュニアオーケストラ、ジュニアクワイアがそれぞれに毎年100人前後で活動している。発足して50年近くが経過し、500人ほどの卒業生がいる。

【音楽教室】

浜松市に本社を置く楽器産業が実施する音楽塾であり、幼児のリズムから大人のためのレッスンまでである。ヤマハ、カワイは1950年代から始めている。浜松市内に限らず事業を展開しており、例えば、ヤマハの音楽教室は、世界40以上の国や地域で、地域独自の文化や国民性との融和を図りながら音楽文化の底上げに貢献している。

指導する楽器はピアノのほかに、管楽器、弦楽器、ドラムなどバラエティに富んでいる。ローランドでは、電子楽器やコンピューター・ミュージックの指導を積極的に行っている。

また、音楽教室の出身者からは世界的な音楽家も登場している。例えば、2002年の第12回チャイコフスキー国際コンクールピアノ部門で第1位となった上原彩子は、3才児のコースから音楽教室に入会していた。世界的なジャズピアニストとして活躍し、参加したアルバムが第53回グラミー賞を受賞した上原ひろみも音楽教室の出身である。

ヤマハの調査では、4歳児の段階で音楽教室に通っている子供の割合は全国平均では5.22%であるが、浜松市内では9.89%である。

(4)浜松の音楽関連産業

地域の資源と人材を活かした楽器産業の集積

浜松にはヤマハ、河合楽器製作所、ローランドなど国際的な楽器産業の本社が集積している。

ヤマハ、河合楽器製作所は、浜松のものづくりに長けた豊富な人材により、20世紀初頭から中期にかけて連鎖的に設立され、各メーカーが切磋琢磨しながら成長してきた。ピアノや管楽器をはじめとする楽器製造においては、部品メーカーや塗装業者などの分業が進み、浜松に集約した形で操業されている。

楽器製造だけでなく、国内外で音楽文化振興のためのコンサートを開催するなど、音楽文化の普及啓発に幅広く貢献している。さらに、現在では、音楽に関わるソフトの開発をはじめ、様々な関連事業を展開しており、メディア・アートと音楽の融合など音楽文化の枠を越えた新たな文化の創出につながっている。

【ヤマハ株式会社】<http://www.yamaha.com/>

ヤマハは1887年にオルガンの製造を始め、1900年には国産のピアノ製造に着手した。それに続いて、ハーモニカや木琴などのさまざまな楽器製造を成功させた。1950年代から電子オルガン、1980年代から電子ピアノの開発製造を行い、世界を牽引する高い技術力を誇っている。2008年には、オーストリアの老舗ピアノメーカーであるベーゼンドルファー社を傘下に収めた。

近年では楽器だけでなく、歌声合成ソフトやネットワーク機器、音声コミュニケーション機器などの製造でも広く知られている。歌声合成ソフトを使用したインターネット上でのバーチャルアイドル「初音ミク」は日本国内でアルバム売上ランキングの上位に位置している。

楽器製造だけでなく、音楽教室事業や音楽ソフト事業、音楽ホール設計・施工など、グループの展開する事業は多岐にわたる。

一般財団法人ヤマハ音楽振興会(1966年設立)では、音楽普及活動を全国的に実施している。

音楽教育活動としては、ヤマハ音楽教室の展開や指導者を育成するヤマハ音楽院の運営などがある。音楽活動支援では、若手音楽家へ演奏の場を提供したり、音楽奨学支援制度を設けたりしている。

【株式会社河合楽器製作所】<http://www.kawai.co.jp/worldwide/>

1950年代からピアノ生産におけるオートメーション化に成功し、家庭向けの普及に向けてさらなる低コスト化・高品質化を進めた。また、調律技術者の育成を目的としてカワイ音楽学園「調律学科」を運営し、感性を持った人材の育成を行っている。

日本の音楽文化の普及に合わせ、カワイ音楽教室の設置と講師の養成、海外の著名な音楽家の招聘を実現して、消費者が音楽を楽しむ環境づくりを整えながら、音楽への志向を高めてきた。

1960年、ショパン生誕150年の年にピアニストの先駆者たちの要請を受け日本ショパン協会を設立し、河合楽器製作所が事務局として、日本の音楽文化の普及と国際交流活動に努めてきた。中でも、ショパン国際コンクールの公式ピアノとして、1985年以降カワイやヤマハのピアノが採用されたことは、日本の楽器技術を世界に発信する意義のある役割を果たしてきたと言える。また、1994年には、本市と「音楽文化友好交流協定」を結んでいるワルシャワ市から、同協会の働きかけにより、ショパン像のレプリカの贈呈をされるなど、現在にも至る海外との交流に功績を残している。

ポーランド共和国は、同協会ならびに河合楽器製作所の長年に渡るポーランドと日本との文化交流への功績を称え、歴代の同協会名誉会長である河合楽器製作所元会長の河合滋と現社長の河合弘隆に、経済関係の民間人に授与される最高位の勲章であるコマンドール十字勲章を授与している。

1963年にはカワイ音楽振興会を設立し、公演事業、団体支援事業、音楽イベント活動などを全国的に実施している。音楽振興会は、2003年からロシアの最高権威の音楽教育機関であるモスクワ音楽院の教授を招聘してのロシアン・ピアニストスクールを主催し、国内外の若手演奏家の育成や、日本とロシアの音楽交流に寄与している。

代表的な事業としては、カワイコンサートがある。国際的ピアニストによる良質の音楽提供と若手演奏家の演奏の場の設定を目的としている。1971年の発足以来、カワイコンサートとして全国で2,200回開催している。

河合楽器製作所は、日本ショパン協会のほか各種音楽団体に対しても必要とされる支援を行っている。

【ローランド株式会社】<http://www.roland.com/>

1980年代に楽器同士で演奏情報をやり取りできる世界標準規格MIDIの制定に中心的な役割を果たした。このMIDI規格の制定に合わせて、コンピューターと電子楽器をつなぐMIDIプロセッシング・ユニットMPU-401を1984年に発表。さらに1988年発表の「ミュージくん」はDTM(デスク・トップ・ミュージック)の世界を切り開く製品となり、以降コンピューター・ミュージックが教育分野、音楽制作の場で活躍することとなる。2013年、このMIDI規格制定に関する功績が称えられ、ローランドの創業者である梯郁太郎はテクニカル・グラミー賞を受賞した。

公益財団法人ローランド芸術文化振興財団(1994年設立)では、公演事業、音楽学習者育成事業、助成事業、国際交流事業などを全国的に行っている。

その中の一つ、レイクサイドコンサートは毎年、ローランド浜松研究所の音響レファレンスホールで開催されるチャリティコンサートである。地域社会における芸術文化の振興を目的とし、プロの演奏家を招いて地域住民や文化団体代表と交流する機会を提供する。2013年までに30回のコンサートが開催された。

そのほかの特徴的な事業として、電子楽器演奏および、音楽制作における先駆的貢献と、電子音楽分野の確立に貢献された方を表彰するエレクトロニクス・アーツ浜松賞を2007年に創設した。これまでに、シンセサイザー音楽の第一人者である作曲家の富田勲、オルガニストのヘクター・オリベラ、アコーディオニストのセルジオ・スカッピニーニが受賞している。

音楽関連産業による音楽文化の支援

浜松では、楽器産業をはじめ、各企業が地域で行政と連携して、音楽文化の振興を支援している。また、企業独自での音楽活動を通じての地域貢献や、市民の音楽活動への協力も展開している。

【浜松市事業への協力】

多くの練習用フルコンサートピアノが必要とされる浜松国際ピアノコンクールでは、使用する各楽器のメーカーがピアノの運搬及び調律師の確保を安価で実施している。

また、浜松国際ピアノアカデミーでは、受講生にピアノの製造工程を知ってもらうために、楽器産業の協力で工場見学を行っている。

浜松吹奏楽大会では、コンクール会場内に企業ブースを設け、楽器のリペアを無償で実施している。

【企業共催事業】

浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバルやハママツ・ジャズ・ウィークはヤマハとの共催事業であり、ヤマハの広報活動により日本中から参加者が募集されている。また、2013年の管楽器アカデミー&フェスティバルの事業費負担割合は浜松市が23.1%、ヤマハが49.3%であり、資金面においても、企業が事業を力強く支援している。

浜松から発信する未来の音楽文化

革新的な製品や技術は、新たな文化を創造することになる。浜松に本社を置く世界的な楽器メーカーでは、新たな音楽を創造するための取組が行われている。ヤマハが開発した新しい世代の音楽インターフェースであるVOCALOIDやテノリオン(TENORI-ON)、ローランドが開発したデジタルドラム、デジタルアコーディオン、電子チェンバロは、未来の音楽文化にとって様々な可能性を持っており、世界中から注目されている。特にVOCALOIDと電子チェンバロについて記述する。

【VOCALOID】

ヤマハ株式会社が開発したデスクトップミュージック制作を目的とした歌声合成技術、及びその応用製品の総称。

メロディー(音階)と歌詞を入力するだけでリアルな歌声を合成する技術であり、そのライセンスを受けた企業によるキャラクターボーカルやアーティストボーカルシリーズの製品が反響を呼んでいる。「初音ミク」が代表的であるが、楽曲の投稿作やテーマにちなんだ楽曲のリクエストなどを扱う専門番組がインターネットラジオで放送されたり、横浜アリーナでコンサートが開催されたりするなど新しい芸術の世界を確立している。ヤマハの開発した技術が、メディア・アートなどの他分野の文化と融合して、新たな文化が創出された事例といえる。

【電子チェンバロ】

ローランド株式会社が製作した電子楽器である。古楽器は美しく繊細な音色が楽しめる反面、デリケートで管理が難しい。そのため、同社では温度・湿度管理や運搬などによるチューニングの必要がない安定したチェンバロを開発した。

この開発にあたっては浜松市楽器博物館が所蔵している多くの歴史的なチェンバロを調査した。その上で鍵盤の重要な特徴を忠実に再現しつつ、演奏表現や弾きやすさにこだわったものとなっている。

6 創造都市ネットワークに対する貢献

浜松市は、前項で示した創造的資源の継続・活用や文化財(cultural goods)の提供により、国内外における創造性の向上へ貢献する。「地域、国内における活動」と「国際的な活動」に区分して、以下に詳細を記述する。

(1) 地域、国内における活動

新たな推進組織

先述の『創造都市・浜松』推進のための基本方針』で示されたまちづくりを実現するための具体的な取組みを

検討するため、2014年には浜松創造都市推進会議を発展的に改組し、企業、各種団体および行政が、相互に連携してクリエイティブシティ形成を推進するための新組織を設置する準備を進めている。新組織は、具体的な政策提言や施策の推進、進捗管理等を担う。これにより、浜松市と市民、産業界、文化振興財団が地域パートナーシップをより強固にするとともに、これまで以上に文化・創造産業の取り組みを進めるべく世界の創造都市とのパートナーシップの促進を希求していく。

また、浜松市が音楽創造都市として音楽に関する創造的人材が集積し更なる飛躍をとげるためには、音楽の専門的な高等教育機関を充実させていくことが重要である。このため、市民音楽団体や音楽家、楽器メーカーや地域経済界、学識経験者などから構成される「浜松市音楽高等教育機関設置構想検討委員会」を2014年から立ち上げ、浜松市における音楽高等教育の在り方について、音楽大学の誘致や静岡文化芸術大学への音楽学部の創設、専門学校創設など、多様な手法と可能性について議論していくこととする。

「みんなのはままつ創造プロジェクト」

「創造都市・浜松」推進のための基本方針」を具現化するためのパイロット事業として、助成金事業「みんなのはままつ創造プロジェクト」を行っている。これは、市民団体又は浜松市内で活動する企業が実施し、有識者が創造都市に寄与すると認めた事業に対し、スタートアップの資金として最高で100万円を浜松市が提供するものである。

これにより、これまで目に見えなかった浜松市内の音楽資源を研究し、広く市民に紹介しようという動きが出ている。

たとえば、facebookを通じて知り合った音楽愛好家の団体「浜松音楽同好会」は、2013年9月に楽器と音楽の見本市「Hamamatsu Music Messe 2013」を開催した。楽器製作、リペア、音楽教室等を行う中小企業22社が出展し、市民イベントながら入場者数は3,000人を超えた。楽器の展示だけでなく、マトリョミン(テルミンの一種)の楽団や大正琴を奏でるアイドルグループの演奏なども交えて話題となり、事業の様子は新聞でも紹介された。中小の楽器関連業者に市場開拓、販売促進の機会を提供する事業として、開催の意義は大きい。

グローバル人材サポート浜松は、「音楽のまち浜松・文化人財発見プロジェクト」を実施した。この事業では、市内の小学生を対象にバスツアーを開催し、楽器職人の工房を訪ねた。子どもたちにとって、トランペットやチェンバロなどの製造工程を知るだけでなく、職人から直接解説を受けることにより、職人の職業観や人生観に触れることができる貴重な機会となった。この事業で子どもたちを工房へ引率したのは、静岡文化芸術大学の有志の学生グループである。学生は、この事業で調査した個人経営などの小規模な工房をリスト化して、ホームページや冊子で情報提供する準備を進めている。工房の市場開拓となるとともに、将来の浜松市の産業を支える人材を育成する事業でもある。

また、「創造都市」とは何かをアーティストやクリエイターと共に議論し、ネットワークを構築する事業を展開する市民も現れた。浜松クリエイティブ産業機構の「Creative Milieu」では、浜松駅前バスターミナルの地下空間という人通りの激しい場所に簡易的な放送局を設け、日替わりで迎えるゲストへのインタビューや演奏などをインターネットで世界に動画配信した。ゲストは主に市内で創造的活動をしている音楽家、劇団員、芸術家、デザイナー、起業家などであり、出演者同士又は出演者と放送の視聴者との間で新たな交流が生まれている。これまで個々に活動している市民が、「創造都市」というキーワードにより分野を超えて繋がっていく画期的な事業となった。さらに、この事業では、札幌市、横浜市、金沢市、神戸市など、国内の先進的な創造都市の職員も登場し、各都市の創造都市推進の取り組みの様子が紹介され、浜松市民に大いに刺激を与えた。

この助成金事業「みんなのはままつ創造プロジェクト」は対象を音楽分野に限らないため、音楽事業の会場にプロダクトデザインのアーティストが作品を展示するなど、市民同士の新たな試みが始まっている。今後もこの助成金事業を通じて、新たな事業者を育成したり、潜在するアーティストを可視化したりするとともに、音楽とアートなど異分野の事業者同士の連携をさらに促進していく。

この取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」「2.女性や若者を含む、特に社会的弱者の創造性と創造表

現活動の促進」、「3.文化財の享受とともに文化的生活との接点向上、参加促進」、「4.文化・創造産業の地域開発計画への融合」の達成に貢献することができる。また、分野としては、「2.優れた取り組みの推進」に該当する。

多文化共生への取り組み

浜松市は、2013年に多文化共生都市ビジョンを策定した。ビジョンでは、「相互の理解と尊重のもと、創造と成長を続けるとともに築く多文化共生都市」を都市の将来像とし、重点施策のひとつとして「多様性を生かしたまちづくり」を掲げ、多様性を積極的に捉え、日本人と外国人による文化の創造・発信、地域の活性化を目指した取り組みを進めていくこととした。

具体的な施策として、在住外国人向け多言語ホームページ「カナル・ハママツ」による市内の文化事業の情報提供、10月を浜松多文化共生MONTHに設定した多文化共生事業の集中開催などがあげられる。

2013年の浜松多文化共生MONTHでは、行政、国際交流団体、NPO法人などによって22のイベントが実施された。例えば、「78ヶ国の浜松市民が大集合!? 未来はみんなでつくる!」では、体や楽器を使ってパーカッションリズムを刻みながら交流を深める音楽ワークショップが行われた。また、日本、ブラジル、中国、フィリピンなどの手工芸を親子で学ぶワークショップ「ワールドクラフトフェア」や、英語のみを使用言語としてマダガスカルスポーツ「クバーラ」を楽しむことにより互いの文化を意識しながら各国の子どもたちが触れ合う「異文化体験交流アクティビティ・クバーラ大会」なども好評を博した。

このように、多文化共生への取り組みを推進していくことで地域レベルでの創造性の向上とマイノリティによる創造力と表現力の強化に努めていく。

この取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」、「2.女性や若者を含む、特に社会的弱者の創造性と創造表現を促進／増進」の達成に貢献することができる。また、分野としては、「2.優れた取り組みの推進」に該当する。

「創造都市ネットワーク日本」への参加

2013年1月に、創造都市の取り組みを推進する日本国内の地方自治体等の連携と交流を促進するために、「創造都市ネットワーク日本(CCNJ)」が設立された。浜松市はいち早くCCNJに参加し、音楽だけでなく、デザインや食文化などあらゆる分野で地域活性を図る都市と交流している。中でも、メディア・アートでユネスコ創造都市ネットワークへも参加している札幌市とは、これまでも札幌交響楽団の浜松公演や静岡国際オペラコンクール入賞者の札幌での演奏会への派遣、浜松市民文化フェスティバルへの札幌の中学校の参加など、活発な文化交流が行われている。

この取り組みを実施又は情報発信すること、あるいは、これらの経験をユネスコ創造都市ネットワークに広げることによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」の達成に貢献することができる。なお、分野としては、「4.会合」に該当する。

札幌市・浜松市 音楽文化都市交流宣言

2009年5月、浜松市は、「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」や「サッポロ・シティ・ジャズ」の開催など積極的に音楽文化の振興に取り組んでいる札幌市と「札幌市・浜松市 音楽文化都市交流宣言」を調印した。

この宣言では、音楽事業や人材の交流を進め、国内外への情報発信の連携等を通じて、互いの音楽文化を振興すること、市民交流や鑑賞交流を積極的に推奨し、両市市民の音楽文化に関する相互理解に努めること、日本を代表する音楽文化都市としての誇りと責任のもと、音楽文化都市交流を通じて日本の音楽文化の振興に寄与することが盛り込まれた。

具体的な事業としては、中学生による合唱団の交流、浜松国際ピアノコンクールにおける札幌市長賞の創設及び第1位入賞者の札幌市での演奏機会の付与などが挙げられる。

札幌市は、2013年にメディア・アート分野でユネスコ創造都市ネットワークに加盟した。今後は、両市の持つ資

源を最大限に活かし、音楽とメディア・アートが融合する取り組みを行うことも可能である。

この取り組みを実施又は情報発信すること、あるいは、これらの経験をユネスコ創造都市ネットワークに広げることによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」の達成に貢献することができる。なお、分野としては、「4.会合」に該当する。

音楽を通じた被災地支援

2011年3月、日本の東北地方はかつてない震災に見舞われた。浜松市からも公的又は私的なあらゆる支援が行われた。静岡文化芸術大学や浜松市文化振興財団では、集めた募金を活用し、現地のニーズに合致した支援活動を行うべく大船渡市の教育委員会と調整を行った結果、小学校を巡回する「打楽器教室」を毎年開催している。講師にはNHK交響楽団の打楽器奏者植松透を招き、児童はプロの演奏技術に触れながら、仲間とともに演奏をすることで笑顔を取り戻している。多くの楽器は、浜松市内の小・中学校、高校が協力し、日ごろクラブ活動で使用しているものをこの事業のために提供している。今後も、音楽を通じた被災地支援を継続していく予定である。

この取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「2.女性や若者を含む、特に社会的弱者の創造性と創造表現を促進／増進」の達成に貢献することができる。なお、分野としては、「2.優れた取り組みの推進」に該当する。

(2) 国際的な活動

音楽は世界の共通言語となりうる普遍性を有している。浜松市は、音楽の文化的側面ばかりではなく、最先端のテクノロジーが拓く未来の音楽産業や、サウンドスケープや音楽療法など、環境学や医学の分野においても音楽の果たすべき役割があることを信じ、ユネスコの理念を実現するため、音楽創造都市の加盟都市と強固なパートナーシップのもと、音楽の持つ無限の可能性についてよりホリスティックなアプローチから探求していく。

浜松市は、これまでもロチェスター市(アメリカ合衆国)などと姉妹都市となるなど国際交流を推進してきた。特に、浜松市がワルシャワ市(ポーランド)と音楽文化友好交流協定を締結したり、アクトシティ浜松がプラハ国立劇場(チェコ)と劇場間での友好交流協定を締結したりするなど、浜松市の音楽的な資源を活かした交流が特徴的である。また、浜松市はUCLG(都市・自治体連合 United Cities and Local Governments)に早くから加盟し、世界の諸都市との連携を推進するなど国際交流の実績が豊富にある。ユネスコ創造都市ネットワーク加盟後には、特にアジア地域において音楽を基盤とした積極的な都市間交流を進めることができる立場にある。

浜松市は、教育・科学・文化の協力と交流を通じた国際平和と人類の福祉の実現を目指すユネスコの設立理念に鑑み、ユネスコ創造都市ネットワーク加盟後には、次の5つの基本方針に基づき、加盟都市との知恵の交換など連携を図りながら、各種事業を企画・実施していく。

- 第1に、世界的音楽イベントを通じて国際交流を推進する
 - 第2に、音楽を通じた異文化理解と文化的多様性の実現を図る
 - 第3に、国際レベルの人材の育成と交流を行う
 - 第4に、サウンドデザインの聖地としての貢献をする
 - 最後に、新しい価値を創造するファンタジスタを輩出する
- これら5つの基本方針について、以下に記述する。

基本方針1 世界的音楽イベントを通じた国際交流の推進

アジアで初めての音楽創造都市として、浜松市が中心となって音楽を通じた国際交流を積極的に推進していく。具体的には、2014年に世界青少年音楽祭と静岡国際オペラコンクールを開催するほか、2015年には浜松国際ピアノコンクールを、2018年には、アジア圏内における吹奏楽のレベル向上及び吹奏楽に携わる人々の人的交流を図ることを目的に吹奏楽に関する研究発表、講演、コンサート等を開催するアジア・太平洋吹奏楽指導者協会(APBDA)の大会を浜松で開催する。

浜松市は、こうした国際レベルの音楽イベントの開催に相応しいインフラ設備を有しているほか、運営ノウハウやイベントを支える市民ボランティアも充実していることから、音楽創造都市ネットワークのアジアにおける創造と交流の拠点として中心的な役割を担うことができる。

浜松市が2014年に開催する世界青少年音楽祭には海外8か国・地域(フィリピン・マレーシア・韓国・香港・イタリア(ボローニャ)・ポーランド・ベトナム・台湾)からの参加申し込みがなされており、アジアを中心とした音楽をテーマとした都市間ネットワークを形成する好機となる。

2015年には、「音楽を通じた文化的多様性に関する国際会議」を開催する。この国際会議では、専門家や学識経験者を招聘し、音楽を通じてユネスコの理念である文化的多様性の実現を目指す。

そして、2016年には、ユネスコの音楽創造都市として使命を果たすために、ルーツ・ミュージックを通じた音楽イベントとなる「世界民族音楽の祭典 in 浜松」を開催する。世界民族音楽の祭典の実現に当たっては、ユネスコ音楽創造都市の加盟都市にも協力を仰ぐ。グローバルネットワークの時代だからこそローカルな文化の再生が求められる中、世界民族音楽の祭典の第1回目の開催テーマを“すべての民族は音楽を持っている”とし、民族音楽・民族舞踊・民族衣装など地域固有の文化の再生が自らのルーツとアイデンティティを再認識する機会となり、違いがあるからこそ他者を理解し合おうという国際平和の根源的なテーマについて音楽を通じて表現していく。

この取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」、「2.女性や若者を含む、特に社会的弱者の創造性と創造表現を促進／増進」、「3.文化財の享受とともに文化的生活との接点向上、参加促進」の達成に貢献することができる。なお、分野としては、「4.会合」、「5.支援プログラム」、「7.政策」に該当する。

基本方針2 音楽を通じた異文化理解と文化的多様性の実現

浜松市は、在住外国人の多い都市として多文化共生の取り組みを進めてきたことから、楽器博物館においても世界の楽器のコレクションを通じて各国固有の音楽文化の研究を独自に進め、市民の異文化への理解を促すよう社会教育の中で実践してきた。

浜松市楽器博物館は、世界の様々な地域の楽器を通じて、「人間」「文化」を考えることを目的に整備された施設であり、世界の楽器を偏りなく同じ目線で平等に展示紹介する世界初の博物館である。1995年4月にオープンし、2015年には開館20周年を迎える。日本初の公立楽器博物館として開館以来、2013年3月末日までに国内外から約154万人が来館している。収蔵品は3,300点ある(<http://www.gakkihaku.jp/eng>)。

常設展をはじめ、特別展、企画展、レクチャーコンサート、講座、ワークショップ、浜松市内の小中学校への移動博物館、所蔵楽器のCD制作、国内外の楽器・音楽文化の調査など、各方面から高い評価を受けている。特に、収蔵品である1802年製造のイギリス式ピアノを用いたCDは、2012年に文化庁芸術祭の最高賞である大賞に輝いた。2013年9月にクロアチアで開催された、文化遺産の保存伝承活動に関する国際会議「The Best in Heritage」では、浜松市楽器博物館館長も招待され、所蔵する古楽器によるCDコレクションを制作している同館のプロジェクトについて報告を行った。

館内では、日本とアジア、ヨーロッパ、アフリカほか世界各地の楽器が常時1,300点をガラスケースに入れることなく展示している。ヘッドホンとモニターで音と演奏風景を楽しむこともでき、実際に楽器に触れられるコーナーもある。この博物館では、世界中の様々な時代と地域の楽器を実際に演奏して聴かせることが特色であり、そのためのメンテナンス技術に関わる人材とノウハウが浜松に蓄積されている。

また、世界のさまざまな楽器をテーマにレクチャーコンサートが開催されており、国内外より、それぞれの楽器の第一人者を招き、楽器の音色だけでなく、楽器の歴史、民族の持つ宗教観や美意識、楽器を取り巻く社会的・地理的環境なども紹介している。名誉館長の西岡信雄は、大阪音楽大学の名誉教授である。フルート奏者を経て日本の洋楽受容史の研究に当たるとともに、音楽人類学を研究者として執筆、講演活動に取り組んでいる。

浜松市は、楽器博物館のこれまでのノウハウを活用し、世界の共通言語である音楽の背景にある歴史・文化・

風俗・生活様式など各国の民族性、地域性にもスポットを当てた異文化理解を促進する効果的なプログラムを開発し、音楽創造都市ネットワークにおける学術シンポジウムの開催など、ユネスコの理念である音楽を通じた国際理解の促進、文化的多様性の実現に具体的に貢献していくことができる。

ボローニャなど既に音楽創造都市として認定された都市は博物館や美術館など充実した文化教育施設を有しており、文化資本および知的資源のストックは相当なものがある。これらの有益な文化資源をユネスコ音楽創造都市のネットワークの中で活用し、新たな価値を創造していく取り組みを積極的に進めていきたい。具体的には加盟都市の文化教育施設間での共同研究や収蔵品等の相互貸し出しなどによる独創的な展覧会の開催などが考えられる。

このプロジェクトは学術的なアプローチになるが、音楽創造都市の可能性を追求する意味で2015年に開催する「音楽を通じた文化的多様性に関する国際会議」の有効なプログラムの一つとして加盟都市との協働体制で実施し、文化教育施設の知的・人的ネットワークをスタートさせていきたい。

これらの取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」、「3.文化財の享受とともに文化的生活との接点向上、参加促進」の達成に貢献することができる。なお、分野としては、「4.会合」、「5.支援プログラム」、「6.育成と能力形成」、「7.政策」に該当する。

基本方針3 国際レベルの人材の育成と交流

浜松市アクトシティ音楽院では、アカデミーコースとコミュニティコースなど14にも及ぶ音楽人材育成プログラムを実施している。国際的にも著名な音楽家を指導者として招いた浜松国際ピアノアカデミーや浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバルからは世界で活躍する演奏家が輩出しはじめている。

また、行政のみならず民間企業がスポンサーとなり、ファミリーコンサートや将来的に期待される若手演奏家を紹介するニューアーティスト・シリーズ・コンサートなども開催されているほか、クラシック音楽ファンの拡大を目指し、忙しいビジネスマンにも気軽に良質な音楽に触れていただく機会として、ランチタイムを有効に活用したオルガンコンサートやワンコイン・コンサートなども開催されている。

多様な音楽人材育成プログラムをはじめとして音楽家や演奏家が発表できる機会と舞台が豊富に用意されている浜松市は、アマチュアから世界で活躍するプロの演奏家まで音楽に携わる多くの人材が年間を通じて訪れる街である。このため、音楽創造都市ネットワークにおいても、加盟都市と相互連携を図り、音楽分野の創造的人材の育成・集積・交流に関する国際的なプロジェクトを実現していくことが可能である。

具体的には、発展途上国の音楽文化の向上に貢献するために楽器の贈呈や、音楽指導者の派遣を行う。また、演奏やトレーニングの機会を提供するために若手音楽家を浜松へ招聘するなど、特にアジアを中心とした国際レベルの音楽人材の育成と交流を促進する。

加えて、静岡文化芸術大学では、2014年、近代の大学として世界最古の歴史を誇るイタリアのボローニャ大学と、学生教職員にとって双方向的な交流協定を締結する。

これまで同大学は、一般市民を対象にイタリア芸術の振興を図るためにイタリアの実力派歌手、ピアニストらによるコンサートやイタリア・オペラ公演を開催している。また、2011年に同大学で開催した「ワタノハスマイル」展は東日本大震災の被災地の子供たちによるがれきを用いたオブジェの展覧会であるが、同展覧会は2012年春にイタリア・ローマでも開催した。イタリアでの展覧会開催に際して、被災地の子供たちがローマを訪れて現地の人々と交流する機会を設け、その収益を東日本大震災被災者のための支援に充てるなどの社会的貢献もしている。

交流協定を締結した後は、音楽や語学に留まらない分野の垣根を越えた学際的な研究交流を行っていく。現在、静岡文化芸術大学の文化政策学部在学する学生が、留学生としてボローニャ大学で音楽学、特にオペラについて研究をしているところである。歌舞伎が東洋の総合芸術であると同様にオペラは西洋の総合芸術である。音楽学を通じて舞台芸術を研究することにより、文学、食、被服、建築、デザイン、さらにはそこに凝縮された先人の思想を学ぶことができる。両大学の交換留学は、五感を通じた比較文化論的見地からの探求に

より、他者を尊重し、「多文化共生」の理念に基づいて世界の平和を築いていく真の文化人を育成することを目指すものである。

ボローニャ大学からは、さらにインダストリアルデザインの分野でも静岡文化芸術大学のデザイン学部の存在に強い関心を寄せていただいている。両大学の人的交流は、今後様々な分野の共同研究、共同事業へと発展していくはずである。

これらの取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」、「3.文化財の享受とともに文化的生活との接点向上、参加促進」の達成に貢献することができる。なお、取り組み野としては、「5.支援プログラム」、「6.育成と能力形成」、「7.政策」に該当する。

基本方針 4 サウンドデザインの聖地としての貢献

浜松市には国際的な楽器メーカー3社の本社がある。ピアノ製造に代表される職人の熟練した技術を要する鍵盤楽器や管楽器から最先端の技術を活用した電子楽器まで、各社が取り扱う数多くの楽器は世界の演奏家や音楽愛好家の演奏を支え、魅了し続けてきた。こうした匠の技から最先端のIT技術までを有する楽器産業が集積し、“サウンドデザインの聖地”とも言える浜松市は、音楽文化を支えてきた産業力を活かして、音楽創造都市ネットワークの中で他都市ではできないユニークな役割を担うことができる唯一の都市である。

具体的には、これまでのピアノや管楽器に関連した音楽文化振興事業を更に充実させていくとともに、世界のデジタルサウンドのクリエイター等が集う電子音楽の祭典、アーティストやデザイナーも参加できる新しいタイプの楽器博覧会の開催など新たな取り組みにもチャレンジをしていきたい。音楽分野の創造都市が新たな価値を創造していくためには、加盟都市はもちろんのこと、音楽を愛する世界の演奏家やクリエイター、エンジニアまで音楽文化産業を支える多様な人材が出会い、交流し、その創造性を刺激し合う場を創造することが必要である。

このため、創造産業を創出する観点から、音楽分野のみならず、デザインやメディア・アートなどの他分野の創造都市とも協働したプロジェクトを起こしていきたい。そのためには、特に日本における創造都市を目指す都市との連携を2014年から強化し、世界に発信する。「創造都市ネットワーク日本(CCNJ)」などのプラットフォームを活用し、クリエイティブ産業を生み出す仕組みづくり、創造都市政策の企画立案能力の向上などについて共に調査・研究を進めていく。たとえば、メディア・アートの分野で既に創造都市に加盟している札幌市の企業が市販化した「初音ミク」を初めとする VOCALOID は、浜松市のヤマハが開発した歌声合成技術的を応用したものである。従来から浜松市と札幌市は音楽文化都市交流を行っているところであるが、今後は両都市が中心となって、音と映像の融合した芸術の振興を図ることが可能である。

これらの取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「1.地域レベルでの創造、生産、流通、文化的素材と事業享受の強化」、「3.文化財の享受とともに文化的生活との接点向上、参加促進」の達成に貢献することができる。なお、取り組み野としては、「2.優れた取り組みの推進」に該当する。

基本方針 5 新しい価値を創造するファンタジスタの輩出

浜松市では「やらまいか精神」と称される何事にも前向きに取り組む市民気質を背景に、世界的な起業家が輩出してきた。世界を席卷した製品群を生み出した創造力の源泉には、起業家たちの夢、心に描かれた確かなビジョンがある。あらゆる創造にとって、生み出すべきものの青写真を思い描く「想像する力」こそが重要である。

主にイタリアのサッカー競技などで、豊かな想像力をもって試合を創造できる優れたプレイヤーを、“ファンタジスタ(想像する人)”という特別な呼称を与えて讃えることがあるが、ギリシャの哲人プラトンは、目には見えない世界に実在している青写真・設計図のことをアイデアと呼び、アイデアの世界に存在する智慧を想起する人間の想像力に創造性の源泉を見出していた。あらゆる創造にとって、ビジョンを描く「想像力」が重要であり、リアルに思い描くことができなければ創造することは困難である。

こうしたことから、浜松市では創造都市政策を総合的に推進していくため、音楽以外にも市民の創造性を高

め、新たな発想を喚起する環境の整備や様々なプロジェクトを実施している。市民活動団体や民間企業等が発意・主導して実施する創造的な取り組みやイベントを支援する「みんなのはままつ創造プロジェクト」では、アートやデザインを活用した商品開発から街なかの賑わい創出のためのアートイベントまで、既成概念に捉われない自由な発想にもとづく多くの提案がなされ具現化されている。

また、産学官の連携によりスタートした小学生を対象とする「ダヴィンチ・キッズ・プロジェクト」では、芸術家でもあり科学者でもあったレオナルド・ダ・ヴィンチを目指し、現在は特に理科・数学、IT の分野について子供たちの才能を開発する英才教育のプログラムを開発している。今後さらに、音楽、外国語の学力を高めるプログラムを検討し、国際的な舞台でも英語による自己表現が可能な高いプレゼンテーション能力や、異なる才能を持つ仲間とも交流できるコミュニケーション能力も備えた世界に羽ばたく創造的人材の育成を目指す。

民間企業では、ヤマハデザイン研究所が楽器を家具と見立て、イタリアのミラノ・サローネに出展してきた。同研究所は、ユネスコ創造都市ネットワークのデザイン都市であるサン＝テティエンヌで開催された国際デザインビエンナーレ 2013 にも出展し、楽器のデザイン手法など創造のプロセスを料理のレシピのように開示するユニークな展覧会「デザイン・レシピ」を開催した。また、浜松市出身の現代アーティストであり、浜松市が 2013 年 11 月に開館した鳴江アートセンターのアドバイザーでもある鈴木康広は、オーストリア・リンツで開催されたメディア・アートの祭典「アルスエレクトロニカ・フェスティバル」をはじめとする国内外のアートフェスティバルに招待作品を展示し、国際的に高い評価を受けている。鈴木康広のユニークで感受性に富むインスタレーションは、私たちが日常生活で見慣れた風景とは違った新たな世界観を提示してくれる。

創造都市政策に注目が集まる中、浜松市は既成概念に捉われない自由な発想ができる人材を生み出す地域性と市民の進取の気性を活かしながら、ユネスコ創造都市ネットワークにおいても、音楽分野だけではなく、メディア・アート、映画、クラフトやデザインなどの他分野の創造都市とも積極的に交流し、新しい価値を創造する

^{あまた}数多のファンタジスタの輩出を目指していく。

これらの取り組みを実施又は情報発信することによって、ユネスコ創造都市ネットワークの目標「3.文化財の享受とともに文化的な生活との接点向上、参加促進」の達成に貢献することができる。なお、取り組み野としては、「2.優れた取り組みの推進」、「6.育成と能力形成」、「7.政策」に該当する。

7 コミュニケーションと可視資源

(1) 創造都市に寄与する情報発信

「浜松市文化振興ビジョン」及び「『創造都市・浜松』推進のための基本方針」

2009年に浜松市は「浜松市文化振興ビジョン」を策定し、市民に文化に関わる本市の目指すべき都市像を明示するとともに、文化振興のための全体的な施策のあり方を整理して、今後の文化振興のありかたについて市民に示した。

「浜松市文化振興ビジョン」では、浜松市が目指す都市のイメージが「市民が主体となって文化を創造し、発展させていく都市」「文化の持続的な循環が行われる都市」であるとし、3つの基本目標として「創造都市・浜松の実現」、「文化の多様性が活力となる都市・浜松」、「音楽の都・浜松」を掲げ、この基本目標を実現するために、市民をはじめ文化団体、NPO、教育機関、地域団体、企業活動など多様な担い手がそれぞれの特長や機能を発揮するなかで、相互の協力連携を図りながら、協働して取り組む体制を築いていくとしている。また、文化・芸術の活動の視点を市民の生活全般から産業基盤、さらにはまちづくり全般に関わるものと規定しており、行政の文化振興部門のみならず、教育、福祉、産業政策などの部門と協力連携し、更に一体的な文化施策を展開していくとしている。

具体的な事業としては、創造的な文化・芸術活動を行うアーティストの支援、文化芸術活動を支える人材や組織の育成などの施策を行うことを定めている。また、音楽文化の蓄積を都市の資産として発信すること、特徴的

な文化事業のPR活動を集中的に行って魅力を市民にアピールすることなど、市民への発信への取り組み方針についても定められている。

2013年に浜松市は、『「創造都市・浜松」推進のための基本方針」を策定した。この方針は、創造都市の意義を明確にするとともに、浜松市が有する創造性を源泉とする事象を挙げながら、目指す創造都市の姿や実現のための取り組みイメージを市民に示したものである。

基本方針では、浜松市が目指す創造都市の姿を「浜松のものづくりや音楽、多文化共生などの根底にある“やらまいか精神”“柔軟で寛容な市民性”が、まちづくりや暮らしに広く活かされていく」、「市民が常に新しい試みにチャレンジし、次々と新しい価値を生み出していく」、「創造的な人材や企業が集積し、日常空間を創造空間（魅力的な都市空間）に変え、市民の暮らしに刺激を与えていく」とし、市民が身近な創造性に“気づき”、様々な場面において創造性を意識しながら“活動”していくような環境の整備に取り組み、“気づき”と“活動”の繰り返しを通じて、市民や企業等の活動の活発化を促し、新たな価値や産業が生まれる創造都市を目指すとしている。市民が浜松市の有する創造性へ気づき、創造的な活動を活発化させるためのエンジンとなるための指針といえる。

「浜松市文化振興ビジョン」及び「“創造都市・浜松”推進のための基本方針」は、印刷物として市民に配布されたほか、市の公式HPでも公開している。また、いずれも策定に当たっては、有識者による策定委員会による検討のみならず、パブリック・コメント制度により広く市民の声を聴いた。

浜松市による情報発信

浜松市では市報を月に1回発行している。市報では、浜松市や浜松市文化振興財団が主催するほぼすべての文化事業の開催情報を掲載するほか、国際規模のイベントの際には特集記事により、事業の趣旨、開催概要、期待される効果などを丁寧に説明する。市報は、各地域の自治会を通じて、浜松市内約31万世帯に全戸配付されている。また、英語版、ポルトガル語版、点字版の市報も作成している。

デジタルツールとしては、公式HP、公式フェイスブック、メールマガジンなどを活用して政策やイベントに関する情報を随時提供している。

また、市政情報誌「あかるいはままつ」は、浜松市が進める政策を、イラストや数字を用いてより分かりやすく具体的に市民に示すための冊子である。2013年の第1号は創造都市をテーマとした。創造都市としての浜松の資源や歴史、市民の創造的事業を紹介するとともに、文化や新産業創出にかかる市の政策について説明し、街の発展につながっていくために市民一人ひとりが柔軟な発想と新しい価値観をもってまちづくりや都市の課題に取り組むことを促している。この情報誌は10,000部が印刷され、公共施設や金融機関、ショッピングセンターなどで配布している。

マスメディアを活用した広報としては、テレビやラジオで市政情報を放送する番組が複数あり、市長が出演して市民に語りかけるコーナーもある。

浜松市文化振興財団による情報発信

浜松市文化振興財団ではHP、フェイスブック、ツイッターなどで、文化や産業に関わる情報を広く発信している。中でも、HPは音楽に限らず文化情報のポータルサイトとして、浜松市内のイベント情報、イベント会場情報、演奏家情報やサークル活動等の会員募集、市民ボランティアの募集などを幅広く発信し、演奏家と事業者及び演奏会場のマッチングなどの機能も有している。

浜松市文化振興財団の情報誌「HCF ニュース」は、年に4回、15,000部ずつ発行し、財団事業の紹介や、市内で活動する文化団体を紹介するほか、浜松市内の食文化や飲食店を併せて紹介し、コンサートの開催が周辺飲食業に経済的波及を及ぼす仕掛けも試みている。

浜松市文化振興財団の友の会組織には、約6,000人の会員がおり、情報誌やイベントカレンダー、各種事業のチラシなどを、月に1回会員に送付している。イベントカレンダーは、公共施設や金融機関などでも配布している。

(2) マスメディア

マスメディアとの協働

浜松市には、市政記者クラブに加盟しているマスメディアが 16 社ある。浜松市では、定期的に記者会見を開催して政策に関する情報発信を行うほか、事業によっては個別に記者会見を開いたり、チラシ、ポスター、施策の概要などを各社に提供したりして、取材を呼びかけている。

(新聞社)

読売新聞社浜松支局

朝日新聞社浜松支局

毎日新聞社浜松支局

産経新聞社静岡支局

中日新聞社東海本社

静岡新聞社浜松総局

日本経済新聞社浜松支局

中部経済新聞社浜松支局

日刊工業新聞社浜松支局

(通信社)

時事通信社浜松支局

共同通信社静岡支局

(テレビ局/NHK 及び SBS はラジオ局併設)

NHK 浜松支局

SBS 静岡放送浜松総局

テレビ静岡浜松支社

静岡朝日テレビ浜松総支社

静岡第一テレビ浜松支局

そのほかにも、コミュニティエフエム放送やケーブルテレビ、文化情報誌など地域に根ざした媒体がある。いずれも文化事業に強く関心を持っており、浜松市や浜松市文化振興財団、あるいは民間企業が行う文化事業に関し、実行委員会への参加、共催や後援など様々な方法により参加している。

マスメディアによる事業

自社で音楽イベントを主催するメディアも多い。中でも、特に以下のふたつは音楽のまち浜松を象徴する大きな文化事業である。

【ハママツ・ジャズ・ウィーク】

<http://jp.yamaha.com/sp/events/hjw/2013/en/>

静岡新聞社・SBS静岡放送と浜松市、浜松市文化振興財団、ヤマハ株式会社、財団法人ヤマハ音楽振興会の主催で、アクトシティをはじめ、浜松駅前や公共施設、ビアホールなどさまざまな会場で事業が実施される。ジャズの持つ多様性・大衆性・芸術性を表現する魅力あふれるものとなっている。

2013 年 10 月には第 22 回目が開催された。綾戸智恵らが出演した「ジャズフェスティバル」がアクトシティ浜松大ホールで開催されたほか、全国から優秀な中高生ビッグバンドを選抜して開催した「スチューデントジャズフェスティバル」、3 歳以下でも楽しめる「親子で楽しむジャズコンサート」、ガーシュインにまつわるエピソードを宝塚歌劇団出身の毬谷友子らが朗読や歌で描き出す「ピアノと物語『アメリカン・ラブソディ』」など盛りだくさんの内容だった。併せて、浜松駅北口広場「ギター」や「ソラモ」など街角のオープンスペース 5 会場でも「ストリートジャズ

フェスティバル」が開かれ、浜松の街なかがジャズ一色になった。期間中は市内のジャズクラブ等 9 店舗でも毎晩ジャズライブを行っている。関連事業への総入場者数は約 12,000 人であった。

【中部日本吹奏楽大会】

中部日本吹奏楽大会は、中日新聞社と中部日本吹奏楽連盟が主催する、中学校及び高校の吹奏楽部を対象とする吹奏楽コンクールであり、1958 年から開催されている。大会前には新聞で特集が生まれ、すべての出場校のプロフィールが紹介される。市民の関心は高く、会期中も連日新聞で報道される。

中部地方 9 県が対象地域であり、連盟に加盟する約 1,300 の学校が演奏技術を競う。各校は、毎年 6 月から 8 月頃に開催される県大会を経て、10 月頃にアクティシティ浜松などで開催される本選に臨む。大編成と小編成の部門ごとに優勝、準優勝、優秀のグループに分けて表彰され、優勝グループの中でもっとも優れた楽団に文部科学大臣奨励賞が贈られるほか、特別賞として中日新聞社賞、浜松市長賞、浜松市教育長賞なども設けられている。

毎回静岡県からは、浜松市にある学校の吹奏楽部が数多く本大会に出場し、優勝している。県内の他都市を圧倒する浜松市の学校の強さは、吹奏楽の街を裏付けるものである。

(3)浜松市による顕彰プログラム

浜松国際ピアノコンクール

3 年に 1 度開催される浜松国際ピアノコンクールでは、第 1 位から第 6 位までの入賞のほか、今後の成長が期待される奨励賞、室内楽団と優秀な協演を果たした者に贈られる室内楽賞、観客の投票によって決まる聴衆賞が選ばれる。また、日本人作曲家による委嘱課題曲の演奏に対して高評価を得た者には、日本人作品最優秀演奏賞が与えられる。

第 1 位入賞者へ 300 万円の賞金が贈られるほか、賞金総額は約 1,000 万円が用意される。また、第 1 位入賞者には日本、ヨーロッパ、アメリカなどで 20 回を超えるコンサート及びリサイタルの機会が与えられる。この中には、「音楽文化交流都市宣言」に基づく札幌市での演奏会や、音楽・文化友好交流協定を結んでいるワルシャワ市での演奏会などもある。

これまでの入賞者には、セルゲイ・ババヤン(アルメニア)、ヴィクトル・リヤードフ(ロシア)、アレッシオ・バックス(イタリア)など現在では著名な演奏家、指導者となった者がいる。このコンクールの歴代入賞者の多くが、その後、チャイコフスキー国際コンクールピアノ部門、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール、リーズ国際ピアノコンクール、ロン＝ティボー国際音楽コンクール、ショパン国際ピアノコンクールなど国際的なコンクールで上位に入賞するなどの活躍をしている。このため浜松国際ピアノコンクールの国際的評価は高く、同コンクールの 1 位、2 位入賞者について、ショパン国際ピアノコンクールは 2015 年の実施要項で予備審査免除の対象とした。

《入賞者のコンクール後の活躍は専用サイトを参照 <http://www.hipic.jp/eng/hipic/activity/>》

静岡国際オペラコンクール

同じく 3 年に 1 度開催される静岡国際オペラコンクールでは、第 1 位から第 3 位までの入賞のほか、入選、三浦環特別賞が授与される。第 1 位の賞金は 300 万円、賞金総額は 600 万円ほどである。入賞者には、浜松市と東京の会場での入賞者記念コンサートの機会が与えられる。

これまでの入賞者にはワシリー・ラデュク(ロシア)、アレクセイ・タノヴィツキー(ベラルーシ)、パク・ヒョンジュ(韓国)らがあり、パリオペラ座、メトロポリタンオペラ、マリインスキー劇場、プラハ国立劇場、ミラノ・スカラ座など世界の舞台上で活躍している。

《入賞者のコンクール後の活躍は専用サイトを参照 <http://www.suac.ac.jp/opera-en/soc/pastcompetitions/>》

浜松市教育文化奨励賞

浜松市では、文化芸術及び教育の振興に優れた業績を上げ、今後一層の発展が期待される浜松市に關係のある個人や団体に対して、浜松市長から「浜松市教育文化奨励賞」を授与している。「浜松ゆかりの芸術家」と「地域文化賞」のふたつの部門があり、これまでに「浜松ゆかりの芸術家」としては、グラミー賞受賞ジャズピアニスト上原ひろみや、メンデルスゾーンコンクール、エリザベート王妃国際コンクールなどの入賞歴を持ち、ヨーロッパでも活躍しているピアニスト仲道郁代など29名が受賞している。「地域文化賞」では、演奏活動や音楽教育で地域文化の向上に貢献した団体、伝統芸能の保存、伝承に貢献した団体、そのほか指導者として功勞のあった個人など個人47名と106の団体が受賞している。

(4)受賞等による認知

文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)の受賞

文化庁長官表彰では文化芸術創造都市部門を設け、市民参加の下、文化芸術の力により地域の活性化に取り組み、特に顕著な成果をあげている市区町村を表彰している。2012年度までに25市区町が受賞しており、浜松市は2011年度に受賞した。

(5)イベント

「世界創造都市フォーラム」の開催

2011年には、「世界創造都市フォーラム」を開催した。この会議は、ユネスコ創造都市として認定されている、ボローニャ、グラスゴー、上海から代表を招き、とくに、ユネスコ音楽都市であるボローニャ、グラスゴー、両市の取り組みの事例を参考に、創造都市政策に造詣の深い研究者を交え議論した。また、これからの音楽と創造都市のありかたについて参加した200人を超える市民とともに討論し、最後に議論の成果をアジェンダとして採択した。

このアジェンダは創造都市フォーラムのシンポジウムにおける発表と討論を通じて、以下の諸点について、その重要性を参加者一同で合意したものである。

- (1)各都市が保持している“創造力の源泉”を探求し、市民・事業者・行政がともにその重要性を認識する。
- (2)市民、音楽家、事業者と行政の連携により、創造的文化産業に関わる人材の育成に努める。
- (3)創造都市間の連携によって、文化と産業の連環したまちづくりをすすめる、市民生活の質的向上を図る。
- (4)音楽都市のサブネットワークにより、固有の文化芸術を発信するとともに、創造的音楽文化産業の活性化を図る。

これは、音楽及び創造的文化産業の振興と都市間連携を図るための浜松アジェンダとして世界に広く広報された。

8 予算

人件費	6,642,384ドル
設備費	5,400,233ドル
コミュニケーション費	423,107ドル
サービス費	23,909,825ドル
会議費	53,291ドル
合計	36,428,840ドル